

[34_3] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :
34(3)

<https://doi.org/10.15017/1470457>

出版情報 : 図書館情報. 34 (3), pp.45-66, 1998-12-31. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :



九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 34, No. 3 (1998)

目 次

- ・在韓和古書事情.....45
- ・情報化時代における韓日文化交流と大学図書館の役割について
 - 秦 教勳教授（ソウル大学校中央図書館長）を迎えて講演会を開催—.....47
- ・Web of Science : Science Citation Index Expanded の導入について52
- ・「サイエンス・サイテーション・インデックス」
 - ～信じられないくらい便利な研究ツール～.....53
- ・Chemical Abstracts CD-ROM 版（CA on CD）検索マニュアル55
- ・百万塔陀羅尼展を開催.....60
- ・学部図書室の利用について
 - 工学部等学科図書室案内—.....61
- ・所蔵資料の博物館等への展示出品.....62
- ・自著紹介.....64
- ・本学関係者著作寄贈図書.....66

在韓和古書事情

■
文学部教授

中 野 三 敏

去年来、松原孝俊教授（言語文化部）の東道で韓国における現存和古書（明治以前成立の和装本）の実態調査の為、数度に涉って渡韓した。その成果の一端は大々的な新聞報道により御存じの向きも多かろうが、詳細は猶整理中のこと、正式な報告には至っていない。但し、若干は既に「九大広報」に記したが、やはり本誌などに最適の話題の事ゆえ、大かたの印象を記すことにする。

ソウルの最初の訪問は高麗大学図書館だったが、

和古書には質量共に殆ど見るべきものなく、却って唐本の明版類の豊富さには一驚した。続いてソウル大学図書館へ。十年ほど以前、一寸訪れた時とは全く雰囲気が変わり、極めて開放的且つ友好的なのは、国情の変化もあろうが、第一には秦館長の開明的精神の賜であろう。六階に別置された旧京城帝国大学文学部の図書は、五十年の歳月を殆ど感じさせないほど整頓されている。又心配していた虫損が無いので質した所、却ってそんな虫がいるのかと怪訝な顔

をされた。気温と湿度との地理的条件によるものだろうが、九州と比べて大変な好条件と言える。ソウル大学図書館本の性格は日本国内の旧帝国大学文学部図書と全く同レベル・同内容の撰集書であり、しかも五十年間密封状態の為、欠本や破損本が殆どない。所謂和古書としてのレベルは、やはり旧帝国大学らしく多くの板本類が近代活字本と同列の扱いで配架され、その数概ね三千点、しかも貴重書指定まちがいなしの古活字本などもちらほらみえている。特色ある集書としては狂歌本の百を越す数や、草双子の七百点というものがあり、これは日本国内と比べても一、二を争う。ただ全体に基本的な板本中心で、写本類は極めて少ない。しかし質量共にこれだけの和古書の現存は幸運としか言いようがない。何しろ旧帝国大学文学部の書庫が丸々一つ保存されていたわけなのだから。

次はソウル中央図書館へ。ここも十年前、まだ南山（ナムサン）の中腹にあった時には、請求した本の冊数の多いものなど、荒縄の様な紐で縛った埃だらけという状態だったのが、移転新築された御蔭か、今回は保存配架の状況が大幅に改善されている。この和古書は凡て旧総督府のものだそうで、全体の数はソウル大学よりやや少なく、内容もやや異なる。

例えば反町弘文荘から購入の狂歌絵本や古写本の勅撰集などもみえ、何やら本好きの個人的な嗜好がうかがえる集書である。今井源衛先生が在韓時に発見報告されて話題をよんだ、明治の漢詩人と田学海の妾宅日記なども、ここの集書の一つである。ここは書庫には入れないので、一九七七年刊の冊子目録で請求するのだが、この目録の記述が余りに凄いのので、とにかく出て来る迄何だかわからないのが一興でもあった。

続く二度目の訪韓では地方の状況を見るべく、大邱図書館、釜山市民図書館などを訪ねたが、大邱は和刻漢籍を中心に四・五十点ほど、釜山は明治本迄入れて四百点ほどの総数で、これという特色はない。釜山は一九九五年刊の松原教授苦心編集の蔵書目録が刊行されていて便利である。

とまれ在韓の和古書はやはりソウル大学及びソウル中央図書館を第一とし、地方は余り期待はもてないようだが、尚探訪の必要性は十二分にある。聞けば去年末の秦館長の九大訪問以来、道が開けて、この年頭には有川館長を中心とする九大図書館一行のソウル大学図書館訪問が実現するという。誠に結構な将来の展望が開けたように思える。

（なかの みつとし 文学部教授）



情報化時代における韓日文化交流と大学図書館の役割について

— 秦 教勳教授（ソウル大学校中央図書館長）を迎えて講演会を開催 —

平成10年11月9日(月)、附属図書館視聴覚ホールにおいてソウル大学校中央図書館長の秦 教勳教授による講演会を開催しました。講演要旨は次のとおりです。

(講演要旨)

皆様にお目にかかれて大変幸せに思っています。

先ず、このような貴重な機会を設けてくださった九州大学中央図書館の有川館長及び司書の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

これまで私は数回にわたり、日本を訪問し、日本の文部省学術情報センター（NACSIS）や多くの大学で、日韓両国の大学図書館の協力に関する意見を交わしたこともございました。

今、大変すばらしい秋という季節に、そして日韓両国間において相互協力の雰囲気が醸成されつつあるこの時期に、再び日本を訪問することになり、私はとても嬉しく思っています。昔から九州地方は韓・日両国間において文化・経済交流の窓口であるばかりでなく、我が国とは一衣帯水の地理的位置にあるために、あたかも「隣りの家」を訪ねるような気楽さで福岡に参ることができました。

この場で個人的な話を申し上げることは恐縮ではありますが、私自身は哲学を研究している人間であります。大学時代から大学図書館に対する並々ならぬ因縁と愛着を持っていたせいでありましょうか、教授としての定年退職を数年後に控えながら、ソウル大学校中央図書館長の重責を担うことになりました。図書館長を拝命してから、すでに4年目に入りましたが、今後とも利用者の立場に立って、図書館運営に努めたいと念じております。幸いなことに母校の輝かしき未来のために思う存分に奉仕できる機会が与えられたことに対して、筆舌に尽くしがたい感謝をしております。人間というものは、願いを心に思い描き続けてさえいれば、いつかは成就するのではないかと信じております。

ところでシステム情報科学の分野において日本有数の研究者である有川館長の前で、またこの場にご参加くださった方々の中には、私より深い専門知識を有する方も多いのではないかと思いますので、本講演で「情報科学とは何か」に言及することは慎むべきでありましょう。

それゆえに、この場において私が一方的にお話申し上げるよりも、情報化時代を共に生きる現代において、情報化が文化の宝庫である図書館に及ぼす影響や、図書館のなすべき役割に関して、気楽に皆様と意見を交わすことができるのであれば、それに優る喜びはありません。

さて個人的な見解を申し上げれば、現代は情報化時代という激しい波に、人類の固有な伝統や文化が洗いざらい破壊される危険にさらされている感があります。それゆえに、皆様とお目にかかった機会に、韓・日両国は東洋の長い歴史的伝統や、文化を継承し発展していかなければならない責任があるということを、再確認する契機になればと願わずにおられません。我々が自己の文化の貴重さを自覚してこそはじめて、その文化は一層光輝くにちがいありません。私は本というものは文化の根本であると考えます。したがって今ここにいらっしゃる皆様方は、その文化の根本を担っていらっしゃる方々であると私には思われます。

現代社会を語るとき、我々の口によく登るのは、まちがいなく「情報」という単語であるように思われます。この場で改めてアルビン・トフラー（Alvin Toffler）の主張を引用しなくても、我々が空気を吸うように情報の中で生活しており、情報なしではたった1日でも生きて居られないほど恐ろしい世の中に住んでおります。

彼の主張のように、情報と知識だけが最高の価値である世の中へと変貌を遂げつつあります。これは単に我が国のケースだけではなさそうに思われます。最近、商品やアイデアが市場に出回るときに、「情報」という名が付いてさえいれば、売れ行きが良いといわれています。面白いことに、韓国では大学にさえ「情報」

という言葉がついている科目には、大勢の学生が押し寄せる傾向が見られます。「図書館情報、経営情報、医学情報」等のように、「情報」という用語が付けられていなければ、まるで時代に取り残されるような気になるようです。社会がこうした動きを加速度的に増していることも事実です。つまり、それほどまでに情報の量が増加したばかりでなく、さらには細分化しているという証拠であると言えるでしょう。それがまさに時代は情報化時代になったという証であります。しかし、いくら情報が多くてもそれを活用しなければ、単なるデータに過ぎません。我が韓国の諺に、「たとえ玉が3斗あっても、それを糸で繋ぎ合わせてこそ宝物だ(いかに価値のあるものでも、その真価を発揮するためには『場』を必要とする)」の意味である」とあるように、いかに貴重な情報であろうとも、全部がバラバラであったり自分で活用できなければ、無用の長物にすぎないという意味です。

したがって情報が社会に大量に流通すればするほど、いっそう図書館の存在価値が高まると共に、逆に図書館自体は新たに対応すべきものが飛躍的に増加することになります。その理由は次のように列挙できるでしょう。

一部の人は、コンピュータとコミュニケーション媒体が発達しつつある今日、様々なことがインターネットを通して可能になるために、次第に図書館が不要になっていくと主張したりします。さらには、もうこれ以上図書館には本は不要であると言って、「Paperless Library」を主張したりもします。私もソウル大学校図書館も、昨年から国内のある大手企業と提携して、莫大な予算を投資し、「電子図書館」構想を推進しております。

なるほど電子図書館は、既存の図書館では想像さえできない程に多くのサービスを提供していることも事実です。しかし、私個人的には電子図書館が決して万能な存在であるとは考えておりません。今後とも、図書館の司書の皆さんが直接に行うべき仕事は無限に存在しております。また現在、私のために通訳なさっておられる松原孝俊教授の調査作業「旧日本植民地下に残置された日本語古典籍の所在情報データベースの作成」のように、今すぐには我々の実生活に必要なものではなくとも、遥かに遠い未来に思いを馳せると、その貴重さは計り知れないものがあります。図書館に保存されてきた人類文化の遺産を保存することも、新しい情報を提供することも、それぞれ重要なことであると私は信じております。それ故に、私はソウル大学校中央図書館の貴重本や稀覯本等を保存するために、特別な施設(書庫)を準備することにしました。現在は過去に、未来は現在なくしてありえません。社会というものは、あらゆるものが一つになって、歴史を作り上げていくのです。今後とも皆様方のお力は大変重要なものであると私には思われます。

したがってこのようにあらゆるものが共存しながら、発展していかなければならないにも拘わらず、現代の情報化社会が目指す最大の目標は、まちがいなく「人間が行ってきたすべてのことはコンピュータで、コミュニケーションのすべてはインターネットを活用すること」であろうと思われまます。調査によれば、去年、全世界で2億5千万台のパソコンが使用されており、それは平均22人あたりに1台の比率であるといえます。さらに2001年には4億5千万台に達し、平均15人あたりに1台の比率に達するというのです。現在、電話もインターネットでかけることができるようになり、インターネットを通して予約したり、キャッシュレス・ショッピングも一般化されつつあります。なお、96年末にすでにインターネットを利用している国家は200ヶ国を越えたそうであります。大学の場合にいたっては、言うまでもなく急速に普及しております。我々をもっとも驚かすことは、このような高い増加率が僅か数年で成し遂げられ、しかも加速度的に広がっているという事実です。

それでは次に、情報化時代がもたらしたコンピュータ活用の増大やインターネットの普及によって、我々の図書館と利用者にとどのような影響が及びつつあるのかを改めて考えてみることにします。したがって、こうした点において我々は再度皆様方と共にこの場において考えてみたいと思います。

図書館の側面から見れば、第一に、我々は新たな勉強を余儀なくされました。情報化時代には新しい研究分野がたくさん誕生したからです。一人私の例だけを挙げてもお分かりになると存じます。私は情報化とは全く無関係に思われる哲学を、その中でも「人間学」という分野を研究しております。しかし、情報化時代

の到来と共に、研究する課題がもっと多くなりました。というのも情報化時代に人間性が失われ、人間が疎外される現象は、どのように克服すべきなのか、という問題に直面したからです。人間学は情報化時代にどのようにアプローチして行くべきなのか。次から次へ疑問が生じてくるのです。

確かに20年前にトフラーが予測した通りに、情報化時代が到来すると、パソコンの発達で人間の肉体的な疲労が減少し、直接的な人間関係が不要になるために、間接的な人間関係がもっと美しく花を咲かせるのではないのでしょうか。もっとも私個人的には、彼の予測には同感ではありません。しかしながら現代の情報化時代は、我々の生活のあらゆる部分を根っこから揺さぶっております。

では、情報を生産し、また処理し、伝達することが生命である我々の図書館はどうすべきでしょうか。多くの図書館においては、DOS Version で OPAC を開発したばかりで、まだ安定もしないうちに、Windows Version に、さらに Web Version も開発していかなければなりません。それは私どもソウル大学校では2年以内にその現象が起こってまいりました。その上に、電子図書館ブームに巻き込まれております。勿論、利用者の多様な環境を考慮し、図書館では2, 3種類の Version を一定の期間中は並行して、サービスを行うべきであると存じます。したがってこのような変化の真っ直中にいる我々図書館人は、情報化時代の最先端にいて、たえずそのリーダーになっている必要があります。利用者の環境が変わった後で、図書館がその後を付いて行くなれば、すべてに遅れるだけでなく、利用者からもそっぽを向かれるはずで。我々が先にその流れを的確に予測し、それに賢明に対処しておかなくてはなりません。新しい変化の波をどのように切り抜けることができるかは、将来のもっとも重要なことです。波に押し流されるか、波乗りを楽しみながら前に進んでいくのかを自らが決定しなくてはなりません。

第二に、図書館組織の再編成です。既存の手作業体制における業務の流れと、電算化以後の業務の流れは大きく変化しました。電算化以後にもその体制が維持出来るならば、それはおそらく電算化ではなく、事務自動化の段階であるはずで。組織体制を変えるためには、自ら新しい分野の人材を必要とします。システムを管理できるグループと、効率的に情報を処理・検索できるグループです。しかし、従来図書館というところは特に保守的な体質を持っておりますから、こうした人材は非常に不足しております。したがって図書館人への教育を絶やすことなく実施したり、多様な訓練の機会を提供したりして、新しい情報化時代に必要とする人材を養成することを怠ってはなりません。管理者である図書館長や事務局上層部も同様に、新しい変化に敏感に対処してこそ、はじめてまともな管理ができるはずで。例えばソウル大学校の例で申し上げれば、1週間に4時間以上こうした教育訓練の時間を設けています。

第三に、サービス窓口の単一化です。最近では官公庁における住民へのサービスにしても One-stop を追求し、あらゆるシステムにおいても User-Friendly を話題にするほど、情報化時代の利用者は複雑で面倒なことを嫌う傾向にあります。我々の家庭で使用される電気製品にしても同様ではないでしょうか。ビデオテープレコーダーや洗濯機の膨大で複雑な機能の全部はとうてい使われてはいないはずで。よく使われている、つまり使い慣れている機能だけが繰り返されているにすぎません。大部分の利用者はそれほど消極的であります。したがって、私が提言したいことは、図書館のあらゆるサービスの窓口をホームページに一元化することです。利用者が図書館のホームページにアクセスさえすれば、すべてが解決するようにすべきです。電子図書館が構築された暁には、より多くのサービスがインターネットを通して提供されるでしょう。将来のインターネットは図書館に行く道路であり、ホームページが図書館のドアであると思われま。

いつか機会がおありでしたら、皆様もインターネット上で私どもソウル大学校中央図書館を訪問してくださいよう、ご招待申し上げます。住所は <http://solarsnet.snu.ac.kr> です。

第四に、利用者層の拡大です。これまで特にアジアの大学図書館は、学外の利用者に相当閉鎖的でありました。しかし、情報化時代、特にインターネット時代が本格化することにより、図書館すべてが開放されました。現在、情報を交換するのにまったく支障はありません。本日の講演の中心テーマが「文化交流のため

の図書館における役割」ですから、一言申し添えるならば、私どもソウル大学校図書館の基本方針は、特に物理的な損傷の恐れのない限り、最大限に資料を公開しようと考えております。我々のことを周りに知らせることはじめ、我らの力で発展できると考えるからです。経済分野と同じように、学術情報も先を争って開放するほど、早く成長するよう思われます。

ところで図書館利用者側からみれば、利用者層はパソコン活用能力によって、明らかに大きく分類されるのですが、しかしながら図書館という公共空間は全ての利用者を受け入れることができるように配慮されるべきです。ある特定のグループだけのために利用されるようであってはなりません。情報や文化財の所有権が誰であろうとも、我々人類はそれを共に共有する権利があるからであります。

少しばかり個人的なことを申し上げます。韓国では日本の研究者に学術情報資料を公開する際には大変な反対がございました。皆様方も少し考えていただければ、あるいはご理解いただけることであることかもしれませんが、私たちは次のような信念を持っています。情報とか文献資料というものは、所有権というものよりも皆が共有すべきものであると思われまふ。日本人にとっての宝物は韓国人にも宝です。韓国の宝物であったとしても、それは日本の宝物でもあります。どのような宝物であっても、それは人類共通がすべて共有すべき宝物であります。したがって、私はソウル大学校のみならず韓国の大学図書館に申し出て、日本人に対して学術情報資料の公開を強く働きかけてまいりました。将来、韓国にある文化財が皆様方に公開されるはずであります。

さて少しばかり話題が変わりますが、皆様方にぜひ私が図書館長の在任中に思い悩んだことを少しばかり申し述べます。それは予算配分の問題です。「予算を配分する時、どのような基準でどのように配分すべきか」という点であります。つまり図書館長の判断による図書予算配分は、今後の図書館のあるべき姿を示すことになるからです。例えば、学術雑誌購入費は図書購入費の何パーセントにするか、とかです。もちろん予算配分の理想は存在しないとしても、我々ソウル大学校が推進している研究中心の大学構想に合致した図書館のモデルを作り上げるために、海外の有名大学の事例を数多く調査しました。ところが、現在もう一つの新たなマルチメディア資料の登場で、新たな問題が出現しました。

九州大学図書館においても、すでに所蔵されていると思われまふが、「Web of Science」のような Web Version のデータベースは最近大量に出版されております。そうであるだけに既存の冊子型資料や、CD-ROM 資料、Web Version 資料をどのような比率で購入していくか、は頭の痛い問題でした。しかし面白い現象も見いだすことが出来ました。というのは利用者により、好みの資料の形態が異なるのは当然としても、最新の海外のデータベースをいち早く必要とする教授たちと、実際にそれを使いこなす能力とは、反比例であることが判明したからです。つまり、少し残念なことですが新入生たちの多くが、我々ソウル大学校の教授陣よりはるかに上手にパソコンを操作出来るのです。

こうした利用者のコンピュータ能力に大きな差がある状況下で、利用者のために何をなすべきかと考えたとき、図書館まで時代に遅れるわけにはいかないと決断を下しました。それは何かというと、新しい形態の資料を可能な限り多く購入しながら、利用者が十分に活用できるまで、最大限の「トレーニング教育」を実施することでした。例えば私どもソウル大学校では大学院生以上と教授陣たちには、1週間2時間以上の教育のためのプログラムを準備しております。わずか一人の申込者に対しても、無条件にトレーニングを実施しております。まるで企業が電子製品を売った後も、徹底的にアフターサービスに努めるように、我々も図書館利用者をお客さまに見たてております。このように少しずつ図書館利用者の利用スタイルが変わりつつあることを肌で感じるだけに、新しい変化を受け入れるために、図書館の不断の努力が今後共に必要であるように思われます。

それでは次に、このように図書館と利用者を取り巻く環境が大きく変化する中で、国内の各図書館はどのように対応すべきでありまふでしょうか。また国家を異にする図書館間の関係もどのように結ばば良いのでしょうか。これらについて考えてみることにしまふ。皆様もよくご存じのように、それぞれの国ごとに日本

の文部省学術情報センター (NACSIS) に該当する図書館の協力体 (大学共同利用機関) があります。我が韓国におけるそれも、国内140個余りの大学図書館が一体となった総合目録データベースを構築しながら、現在では新たなタイプのデータベースの構築の協議にも入っております。すべてを消極的な次元で捉えて、データを提供するだけで何も得る物はないと考えるのであれば、おそらくいずれの機関も参加しようとしなはずです。しかし提供することは、その一方で入手することです。自分には大した価値を持たない物でも、他人の喜ぶ物となるように、情報は使用する人によりその価値も自ずと変わるものです。それ故に次々と情報の公開化が要請され、世界化が必要とされるのです。インターネット上では早くも「地球村」が出来上がっています。

しかし、ここで見逃してはならない大切なものがあります。情報の質です。あらゆる情報がすべて有益であるとは限りません。人類文化を害する悪質で不健全な情報もあります。現在、世界中あらゆる国家において国家情報基盤構築事業 (National Information Infrastructure Initiative) を競い合って推進しています。その代表的な国家である Singapore の例を挙げると、その国では不健全な情報の流通を防ぐために、事業の初期段階で国家電算網の使用に数多くの制限を付け加えたそうです。しかし、今では国民意識の変化に伴って、自ら進んで必要な情報を作りだし、活用できるように誘導しています。情報化時代において、大量の情報に対する完璧な検閲は事実上不可能ではないかと思われまます。

そうであるとするならば、一国の国力と文化発展に一番必要な情報はどこで生産され、どこが提供するのでしょうか。それぞれ大学です。大学にその国の将来がかかっており、私ども大学図書館は情報化時代に特別な使命を果たさなくてはなりません。特に九州大学や私どもソウル大学校のような国立大学の責任は重大です。両大学図書館は、両国間の相互理解の増進のために、大きな貢献が出来るように努めなくてはなりません。あたかも見知らぬ男女が出会い、互いに良い感情を抱き、さらに結婚にまで至るためには、先ず互いによく知ることが大切であるように、今回の私の訪問によって、日韓両国が分かり合う良い出発点となるように祈りながら、私のささやかな講演を終わらせていただきます。

重ねて、心温まる歓迎をしてくださった皆様に感謝の言葉を申し上げます。どうもありがとうございました。

(チン・ギョウフン ソウル大学校教授)



秦 教勳ソウル大学校図書館長



秦館長と通訳の言語文化部
松原孝俊教授 (右)

注：本要旨の翻訳にあたっては、金 英姫氏 (九州大学大学院比較社会文化研究科博士課程2年・日韓対照言語学専攻) 及び松原孝俊教授 (九州大学言語文化部・兼大学院比較社会文化研究科) のご協力をいただきました。

Web of Science : Science Citation Index Expanded の導入について

中央図書館では、このたび平成11年1月から引用索引データベースである Web of Science の内の自然科学分野のファイルである Science Citation Index Expanded を導入することになりました。

このデータベースは、先に平成10年3月23日から同5月22日までの2ヶ月間にわたって、九州地区の国立大学附属図書館の共同利用実験として、大型計算機センターのご支援のもとで提供されたものであり、その際のアンケート調査においても、是非導入してほしいとのご意見が非常に多く寄せられたものです。なお、この共同利用実験の報告書は、<http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/kyogikai/wos.htm> に掲載されておりますので、ご関心のある方は是非ご覧ください。

実験終了後、本格的導入に向けて検討を重ねてまいりましたが、このたび総長のご理解をいただき、総長経費により国立大学としては初めての導入が実現することとなりました。

今回導入しますこのデータベースは、自然科学の全ての研究分野の主要雑誌約5,300誌を厳選し、その収録誌の全論文を索引化しており、それぞれの論文の全著者、著者抄録、引用文献、全著者の所属機関名、住所を掲載しています。このデータベースを利用することにより、通常の文献検索では一般的な検索手法である著者名検索や論文タイトル検索などに加えて、引用文献および被引用文献の検索が可能になりました。引用関係を調査することで、同一の論文をベースとした重複研究の確認ができたり、研究

論文の被引用度をカウントすることで、大学および研究者の自己評価のための参考データとできるなど、他のデータベースにない特徴をもっております。

今回は取り敢えず1995年以降の自然科学分野のデータを提供するものであり、イントラネット版としてサイト契約により、九州大学の全キャンパス（箱崎地区、病院地区、六本松地区、筑紫地区、別府地区）の全構成員が利用できます。IPアドレスのみ制御を行っておりますので、本学のキャンパス内であれば、Web上から自由に利用できます。なおサーバに関しましては、今回も大型計算機センターのご支援をいただいております。

今後の予定としましては、アンケート調査のご要望にもありましたように、まずデータの遡及年を10年に延ばすべく、1990-1994年の遡及データの導入を予定しております。

Web of Science のホームページ：

<http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/wos>

==問い合わせ先：附属図書館情報サービス課

参考調査掛（内線2336、8256）==

(E-mail : ref1@lib.kyushu-u.ac.jp)

「サイエンス・サイテーション・インデックス」 ～信じられないくらい便利な研究ツール～

理学部教授 巖 佐 庸

1998年の3月から5月まで試行された”Web of Science”のScience Citation Index Expanded (SCI)が、正式導入されると伺いました。これは国立大学では初めてだそうで、自然科学分野のジャーナル論文を直ちに検索できます。コマンドを覚えておく必要はなく、研究室にあるパソコンから画面をクリックするだけで、ある用語をタイトルや抄録に含む論文をすべてリストにしたり、それぞれの抄録を読んだり、またある論文を引用している他の研究者の論文がたどころに分かったりと、実に楽に使えます。私のような計算機嫌いの素人にもとても使いやすく、図書館で雑誌をめくる努力とは比較にならない時間で、様々な分野の研究がすぐに分かる素晴らしいものです。一度試してみると病みつきになって、研究を進めるにあたっては欠かすことのできないツールになると思います。九州大学の教官・大学院生をはじめできるだけ多くの方に使っていただきたいと思い、私の経験など少し作文してみることにしました。

SCIについては、以前にイギリスの共同研究者のものを使っていたことがあります。それはイギリスの大学および研究機関の関係者ならば自由にアクセスできるもので、1981年以降の引用データがすべて入っていました。Telnetを用いてコンピュータの端末から使えるものでした。マニュアルも不要で、画面を見ながら操作するだけでどんどんいろいろな知識が入ってきます。検索して得た論文リストやアブストラクトは電子メールで手に入るのです。

例えば、論文を書くときに必要な他の研究者の仕事を知ることがたどころにできます。ことに、総説論文の執筆などで手元にない雑誌であっても内容を知ることができます。アブストラクトを読んで、本当に実物を読む必要があると判断したものだけをコピーするというやり方で、関連論文が漏れなく手に入るのです。

また自分の書いた論文が、どれだけのインパクトを与えているのかを知ることができます。自分では良いと思っていたものがそれほど注目されていないとか、逆に意外にインパクトを与える論文があったりとか。よりインパクトのある仕事をしようという意欲を強くかき立てられたものでした。

ところが九州大学に帰ってきますと、文献検索は中央図書館のOVID検索システムによるCurrent Contentsしかありませんでした。これでは出たばかりの論文はともかくとして、過去になされた重要な仕事を知るとい意味ではほとんど使えません。また被引用件数のデータもありません。でも仕方がないのでお金を支払って一応使用契約をしています。

そこで学術情報センターに登録してSCIを使用できるようにしました。ところがそのシステムは昔ながらのシステムでコマンドを多数覚えておかねばならず、コンピュータ好きの人ならばともかく、私のような素人にはとてもではないが使い物にならないのです。しかも、時間当たりでお金がかかります。普通に文献検索をしていると一回に3,000円といった調子でとられて、落ち着いて考えながら使うことなどとてもできません。

イギリスやアメリカの研究者や大学院生はとても便利なデータベースが自由に使えてどんどん仕事を進めているときに、九州大学の教官・大学院生は図書館で雑誌に目を通すといった昔ながらのやり方でしか研究が進められないとすれば、広い視野で世界的なレベルの仕事を行って行くことができないことは明らかでしょう。きわめて大きなハンデを負うことになります。

どうしようかと思っていましたところ、今年の3月から5月にSCIの無料試用を知り、試してみても感激いたしました。これはイギリスで使っていたシステムよりもさらに便利で、これだとある論文を引用している他の論文を直ちにリストにして、それぞれのアブストラクトなどを見ることができます。いったんこのシス

テムを経験すると、これなしには論文の執筆も研究計画の立案もできなくなる気さえします。同じ様な感想は、私と同じ生物学教室の他の教官からも多数いただきました。この度、それと同じシステムが使用できるようになったとのこと、実現に力を注がれた方々には大変感謝いたします。

新しい学術誌が次々と出版されているのに、雑誌代が高くて新たなものが購入できず、むしろ図書館で購入している雑誌も取り止めざるを得ないことが大変大きな問題になっています。しかし、より大きな問題は、たとえ雑誌が図書館にあったとしても、それを見に行き行ってチェックするだけの時間がないことです。データベースが使えれば、たとえ九大になくともコピーサービスで集めることも可能ですし、自分の興味ある分野に関係した論文をすべておさえることは、忙しい教官にもそれほど難しいことではありません。先ほど述べましたように、被引用データベースは自分の仕事がどれだけインパクトを与えたのか、自分では良いと思った仕事でも他の人には無視されたとか、逆に知らない人に引用されて発展しているとかを知ることは、研究を進める上で特に大事なことだと思います。

また、ある基本論文をもとに自分の研究計画をたてていたとして、世界中で同じように目をつけて仕事を進めているグループがどこにあるのか、またどこまで研究が進んでいるのかをたちどころに知ることができるのです。限られた研究時間と研究資源で、他で既になされたことを重複して行なっても、世界的に注目を集めることはできません。その意味でも重要なインパクトを与える仕事をするには、このようなデータベースは欠かせないのです。これは研究の境界領域や新しい分野で仕事を始めようかというときには特に重要です。自分が何年もその分野で仕事を積み重ねていけば、世界中の主だった研究グループは知っているという気持ちになれるかもしれませんが、そのままだと研究者が新しい分野に進出して仕事を展開することにとっても支障になります。データベースは研究分野の間の障壁をかなり小さくしてくれるツールといえるでしょう。データベースを大学院生・研究生に使わせるだけで、彼らの仕事に対する姿勢はシビアで真剣なものになっていくと思います。最近自己点検評価のために教官の研究業績リストを調査して印刷したりしています。簡単につかえるこのデータベースが、全教官および大学院生に自由に使えるようになることは、九州大学の研究・大学院教育のレベルを押し上げる上にはるかに大きな効果があると思います。

ただ一つ改善すべきこととしては、このデータベースが1995年以降の出版物に限られていることです。当然ながら80年代の引用はカウントされていません。重要な仕事は1990年代前半や1980年代にもなされており、現時点で論文を執筆するときにも、これらが直接参照できないことはたしかにハンデです。もしできることならば、将来にはもっと以前の引用データを含められるようにしていただけると幸いに思います。

折角実現した SCI。九州大学の教官、大学院生には、ぜひ一度使ってみて欲しいと思います。自分の書いた論文がどのようなインパクトを与えているのか、自分が今興味をもっていることに注目している人は他に誰がいるのか、本当にたちどころに分かるのです。

研究分野を簡単に見渡せることができるようになり、研究のやり方がすっかり変わってくるように感じるでしょう。(Web of Science のホームページは <http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/wos> です)

(いわさ よう 理学部教授)

お知らせ

Chemical Abstracts 13CI(1992-1996) on CD が利用できます

医学分館に設置されたCDサーバ (NSCDNet) からの提供データベースに、新たに「Chemical Abstracts 13CI(1992-1996) on CD」が加わりました。したがって、平成11年1月より Chemical Abstracts は12CI (1987-1991) から13CI(1992-1996) までの10年間のデータをCDサーバで検索することが可能になりました。

検索のホームページアドレス：<http://www.mlib.lib.kyushu-u.ac.jp>

(医学分館参考調査掛 内線：6040)

Chemical Abstracts CD-ROM 版(CA on CD)検索マニュアル

Chemical Abstracts(CA)は、化学と化学工学に関する文献を収録した抄録・索引誌で、Chemical Abstracts Service(CAS)が作成しています。CA on CD は、CA を CD-ROM の形態で提供するものです。

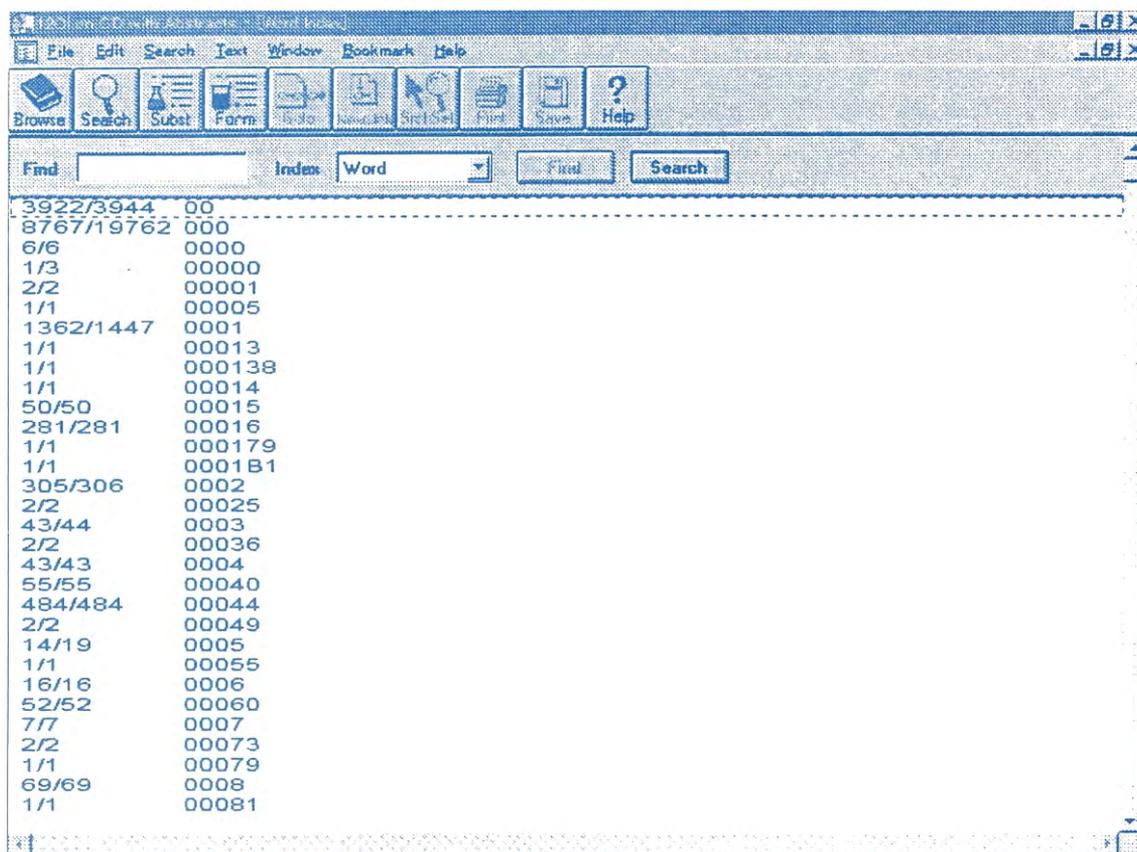
CA on CD の検索関連の機能には、「Index Browse」、「Word Search」、「Substance Hierarchy」、「Formula Hierarchy」があります。紙面の都合上、以下ではこの内の「Index Browse」と「Word Search」について基本的な操作方法を説明します。また、検索結果の表示、保存、印刷についても説明します。その他の操作方法等については、各部署の図書掛にお尋ね下さい。(http://www.mlib.lib.kyushu-u.ac.jp から利用できます)

1. Preferences の設定

検索に入る前に、まず「Preferences」と呼ばれる部分の設定を変更しておく必要があります。この設定は、端末ごとに一度行えばその後は必要ありません。「File」メニューから「Preferences」を選択すると「Preferences」ウィンドウが開きます。このウィンドウで「Words Apart」を「9」に変更します。「10」となっていると、後述する「Word Search」での検索ができなくなります。最初から「9」となっていれば、何も行う必要はありません。

2. Index Browse による検索

Index Browse は、特定の検索フィールドに索引されている語を一覧して探すのに使われます。この機能を使うには初期画面で「Browse」ボタンをクリックします。[Word Index] ウィンドウが開き、データベースの「Word」フィールドに索引されている語が数字を先頭にしてアルファベット順に表示されます(図.1)。該当文献の数とその語が出現する合計数が語の左側に表示されます。



(図.1)

(1)フィールドの選択

表示されるフィールドの初期値は「Word」です。他のフィールドに変えるには「index」とあるボックス内のボタンをクリックし、表示されたリストからフィールドを選択します。選択したフィールドに索引されている語が画面に表示されます。フィールドの種類は文末にある「参照. I」の通りです。

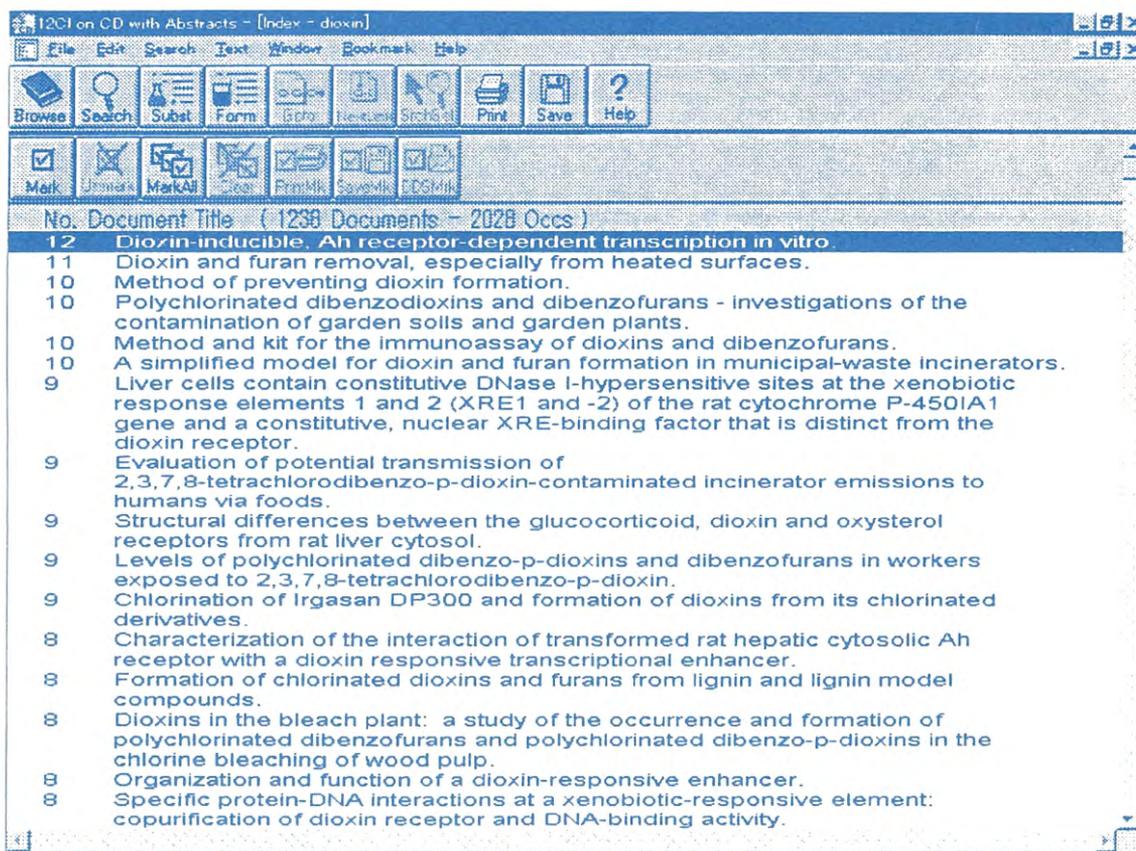
(2)検索語の選択・入力

スクロールバーやキーボードの「↑/↓アローキー」などを使って画面をスクロールさせ、検索したい語を探します。探している語が見つかったら、その語をクリックして選択します。「Shift キー」や「Ctrl キー」を使って複数の語を選択することもできます。

特定の語を直接見つけるには「Find」とあるボックスにその語を入力します。文字が一つ入力されるたびに、画面が索引のその部分に移動して、該当する語をハイライト表示します。該当する語がなければ、その語の次の位置に移動します。

(3)文献の検索

検索したい語を選択した後、その語をダブルクリックするか「Index」とあるボックスの横の「search」ボタンをクリック（複数の語を選択した場合はこの方法で）すると、検索が実行され、その語を含む文献が一覧表示されます(図.2)。文献のタイトルは、検索した語がその文献に出現する回数の多いものから少ないものの順で表示されます。文献の書誌的な情報や抄録を見るには、タイトルをダブルクリックします。もし一つの文献のみがヒットした場合は、その文献の書誌情報等がすぐに表示されます。



(図.2)

3. 表示・保存・印刷

(1) 文献の表示

書誌情報等を表示している文献の次にリストされている文献を表示するには、以下のいずれかのボタンをクリックします。

Next …… 検索結果リストの次の文献を表示します。

Prev …… 検索結果リストの一つ前の文献を表示します。

※画面を最大表示にして複数の文献の内容を順にディスプレイ表示した場合、画面上では見えなくても前に表示したウィンドウはクローズされるまで開いたままで残っています。多くのウィンドウを順次開いていくと、それ以上ウィンドウを表示することができなくなることがあり、そのような場合には開いているウィンドウを閉じる必要があります。表示しているウィンドウを閉じるには、ウィンドウ右上の「X」をクリックするか、「File」メニューから「Close」を選択します。表示しているウィンドウが閉じられ、ひとつ前のウィンドウが表示されます。すべてのウィンドウを閉じるには「Window」メニューから「Close All」を選択します。CA on CD の初期画面が表示されます。

(2) 文献の保存

書誌情報等を表示している文献を保存するには、「Save」ボタンをクリックします。「File Name」とあるボックスにファイル名を入力し、文献を保存したいディレクトリを選択します。「Save File as Type」とあるボックスからフォーマットを選択します。それから「OK」をクリックします。保存の形式には以下のものがあります。

保存の形式：

Text Files (*.txt) : テキスト形式

Tabbed Files (*.tab) : タグ単位の情報をTABで分割して保存する形式

Comma Files (*.csv) : タグ単位の情報をカンマで分割して保存する形式

Tagged Files (*.tag) : テキストデータにTI, ABなどのタグを付けた形式

ただし、抄録中の構造図は保存できません。

検索結果リストから文献を保存するには、保存したい文献をクリックして選択し、「Mark」ボタンをクリックします。もしくは「Mark All」ボタンをクリックして全てを選択します。それから「SaveMk」ボタンをクリックします。これ以下の流れは上記と同じです。

(3) 文献の印刷

書誌情報等を表示している文献を印刷するには、「Print」ボタンをクリックします。それから「OK」をクリックします。

検索結果リストから文献を印刷するには、印刷したい文献をクリックして選択し、「Mark」ボタンをクリックします。もしくは「Mark All」ボタンをクリックしてすべてを選択します。それから「PrintMk」ボタンをクリックし、「OK」をクリックします。印刷の形式には以下のものがあります。

印刷の形式：

All …… マークされた文献の全項目を印刷します。

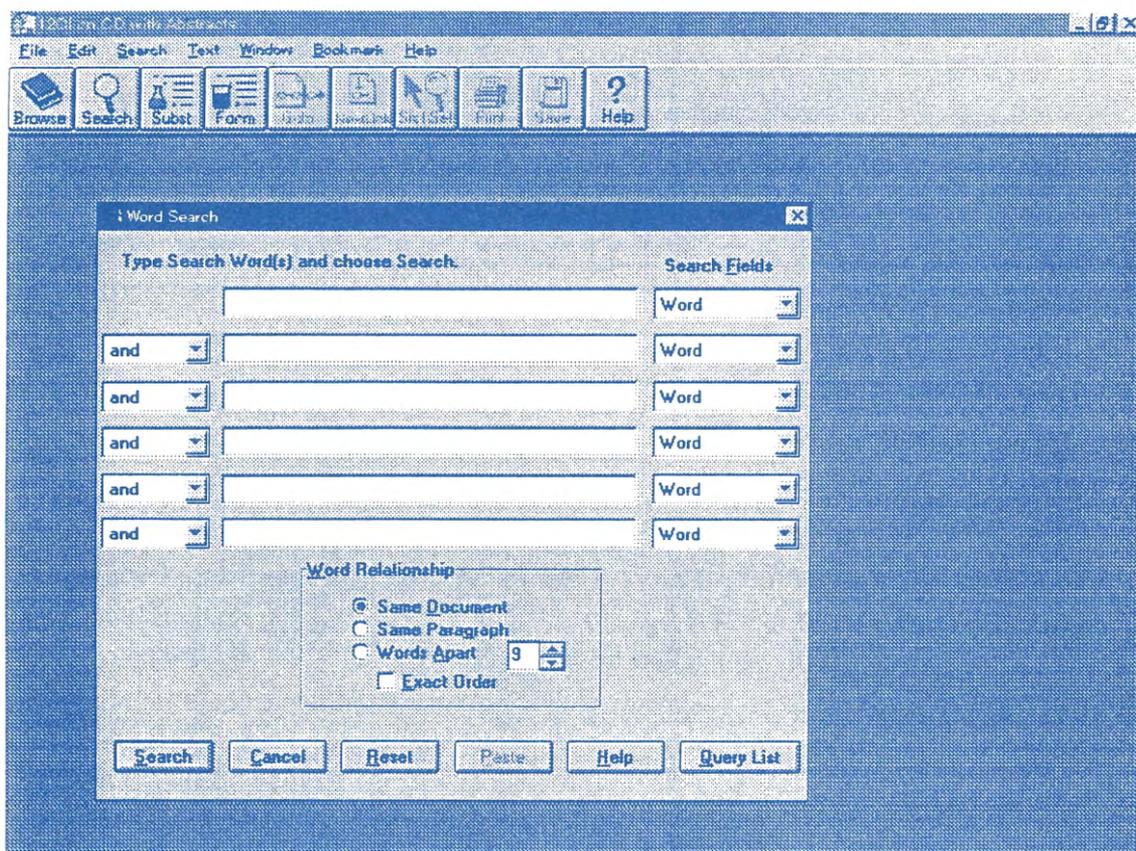
Bibliography …… マークされた文献の書誌項目を印刷します。

Bibliography

+ Abstract …… マークされた文献の書誌項目と抄録を印刷します。

4. Word Search による検索

Word Search は、特定のフィールドの検索や、検索語を組み合わせての検索に利用します。この機能を使うには初期画面で「Search」ボタンをクリックします。[Word Search] ウィンドウが表示されます(図.3)。



(図.3)

(1) 検索語の入力と検索フィールドの選択

ウィンドウ中央の横長のスペースが検索語入力域です。検索語入力域に検索語を入力します。初期値の「Word」フィールドのまま検索するか、「Search Fields」とあるボックス内のボタンをクリックして表示されたリストからフィールドを選択します。検索フィールドの種類と定義は文末にある「参照. II」の通りです。

(2) 検索語の掛け合わせ

複数の検索語を入力し、それらを掛け合わせての検索ができます。掛け合わせを行うにはブール演算子と呼ばれるものを使います。演算子は検索語入力域の左側にあります。「and」が表示されているボックス内のボタンをクリックして演算子を選択します。

ブール演算子の種類：

- and 指定した検索語をすべて含むレコードを検索します。
- not 最初の語を含むレコードから次の語を含むレコードを除いたものを検索します。
- or 入力した検索語のいずれかを含むレコードを検索します。

(3) ワイルドカードを使っての検索語の入力

ワイルドカードと呼ばれる以下のような記号を検索語とともに使用できます。ワイルドカードは語の先頭では使えません。

ワイルドカードの種類：

? 検索語の中で、このワイルドカードのある位置に一つの文字を置き換えた語を検索します。

例：BASE? …… BASES や BASED を検索できます。

CH2??O2 …… CH2BrO2 や CH2ClO2 を検索できます。

* 検索語の終わりに0かそれ以上の文字を加えた語を検索します。

例：ADSOR* …… ADSORB や ADSORPTION や ADSORBENTS を検索できます。

JACKSON* (著者名フィールドで入力) …… S.L.Jackson や W.B.Jackson を検索できます。

※著者名は、「姓、(カンマ) △ (一つのスペース) 名」の形で検索します。姓と名をつなげた形で索引されていますので、姓のみだけ入力したような場合はヒットしません。

姓に続けてワイルドカードの「*」を使用するか、名のフルネームまで入力するか、名のイニシャルに続けてワイルドカードの「*」を使用するなどの方法をとる必要があります。

(4)文献の検索

検索語入力域に検索語を入力して、適当な検索フィールドを選択し、[Word Search] ウィンドウ内の「Search」ボタンをクリックします。

文献の表示方法等は「Index Browse」の場合と同様です。

参照

I.フィールドの種類

Word	CA 索引名(Compound)
言語(Language)	一般事項(General Subject)
更新(Update)	資料種類(Document Type)
著者名(Author)	分子式(Formula)
発行年(Year)	雑誌名(Journal)
CAS 登録番号(CAS Registry Number)	CA セクション(CA Section)
機関(Organization)	CA 登録番号(CAN)
特許番号(Patent Number)	

II.検索フィールドとその定義

Word	文献のタイトル、抄録、キーワード、所属機関の所在地、索引見出し語、テキスト説明句からの切り出し語	Journal	雑誌名の省略形
CAS RN	CAS 登録番号	Language	文献の使用言語
Author	著者名	Year	文献の出版年
Gen. Subj.	一般事項索引の見出し語	Doc. Type	文献の種類
Patent No.	特許発行国のコードと特許番号(出願番号) 特許レコード及び対応特許を含む	CA Section	CA セクション番号とセクション名(句)、CA セクション番号、関連セクション番号
Formula	化学物質の分子式	Update	YYYY - UU(例、1996-02、1996-12)と VVV-II(例、120-04)。YYYY-UU は CA on CD の年版と更新番号、VVV-II は CA の巻と号に対応
Compound	化学物質名(CA 索引名)		
CAN	CA 抄録番号		
Organization	機関名、会社名、特許出願人、団体著者名		

(医学分館参考調査掛)

百万塔陀羅尼展を開催

中央図書館では平成10年11月12日(木)から12月25日(金)の間、中央図書館玄関ホールにおいて「百万塔陀羅尼展」を開催しました。展示の内容は次のとおりです。

出展物解説（百万塔陀羅尼展解説資料より）

百万塔

奈良時代、称徳天皇の発願により製作された百万基の木製の小塔で、高さ約21.5センチ。天平宝治八年(764)恵美押勝の乱後称徳天皇が『無垢浄光陀羅尼』の諸説により百万基の三重小塔を作り、宝亀元年(770)四月に完成し、塔の中央には年紀の明白な現存する印刷物では世界最古のものとして著名な、根本・自心・相輪・六度の陀羅尼経が納められている。

百万塔の名は百万基という製作数にちなむが、これは近世の呼び名であり、当時は三重小塔と呼んだらしい。完成後は法隆寺、大安寺、元興寺、興福寺、薬師寺、東大寺、西大寺、弘福寺、四天王寺、崇福寺の十大寺に分置した。

現在、法隆寺にのみ塔身45,755基、相輪26,054点がこのり、簡素で優美な姿を誇る。

百万塔陀羅尼

百万塔の中に納入された版行の『陀羅尼経』。小塔を作り『陀羅尼経』を納め安置すれば、滅罪と鎮護国家の功德があるという秘密部に属する『無垢浄光陀羅尼経』(唐の弥陀山訳)の所説により百万塔が造顕された。その塔身上部筒状の孔に本経所説の六種の陀羅尼のうち修造仏塔・大呪王陀羅尼の二種を除き、根本・相輪兼中(相輪)・自心印(慈心)・六波羅密(六度)の四種の陀羅尼が納入され、『続日本紀』に「露盤之下、各置根本・慈心・相輪・六度等陀羅尼」というのに照応する。

現在、法隆寺に三千七十六巻と断片二千余点が伝来する。調査の結果、根本陀羅尼が三種、他はおのおの二種類の版を用いたことが判明している。麻紙か楮紙に複数の版を並べて摺ったあとで紙を切断している。従来、木版説と銅版説があるが、未だ、決定をみていない。

年紀の明白な現存する印刷物では世界最古のものとして有名である。巻首に經典名『無垢浄光経』と陀羅尼名を併出し、続いて陀羅尼の呪を一行五字詰めで版行している。

明治四十一年(1908)百万塔に付し優品百巻が国宝(現重要文化財)に指定される。

本学附属図書館の百万塔の陀羅尼は、巻首が欠損しているが、相輪陀羅尼経と考えられる。



学部図書室の利用について

—工学部等学科図書室案内—

学内部局図書室の利用手続きの簡素化・統一化については、平成10年10月1日から実施されておりますが、工学部等学科図書室を利用される場合は下記のごとくに留意され利用ください。

1. 所蔵調査について

所属される部局の図書掛または附属図書館で、所蔵学科まで調査してください。

2. 事前連絡について

学科図書室によっては専任の職員が不在、あるいは学科事務との兼務等により対応出来ないことがあります。所蔵調査されましたら、利用が可能であるか学科図書室へ電話等で確認のうえ工学部等図書掛へ来室ください。

3. 工学部等図書掛で利用申込書を発行します

① 図書館利用者票、身分証明書、学生証を当掛に提示ください。

② 利用申込書に記入し、利用申込書のBとCを学科図書室へ持参ください。(借用期間は各学科で異なります)

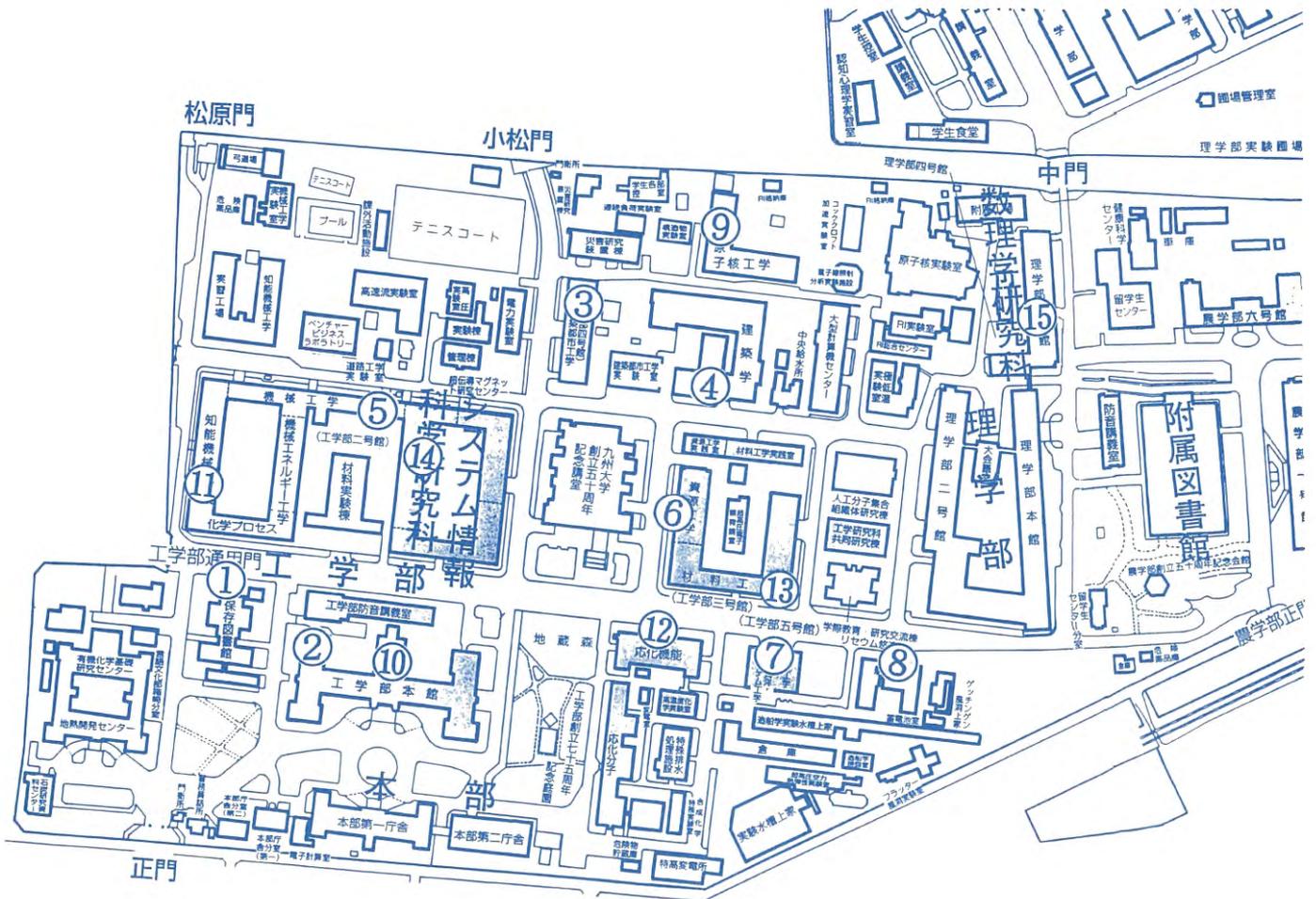
③ 利用した図書館資料を学科図書室へ返却されますと、返却印を押印した利用申込書Bが返されますので当掛へ返却ください。(利用申込書は利用されなかった場合でも返却ください)

4. 利用申込書について

① 書名等は略さないで記入ください。

② 発行当日限り有効です。白紙の発行はいたしません。

③ 取り扱い時間は午前9時から午後4時30分です。



工学部及びシステム情報科学研究科図書室利用案内

場 所	図書室名	電話番号	開室曜日	開室時間	備 考
①- 2 F	工学部等図書掛 (工学部中央図書室)	642-3248	月～金	9:00～20:00	
②- 3 F	工・地球環境 (土木)	642-3307	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
③- 2 F	工・地球環境 (水工)	642-3315	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
④- 1 F	工・建築学科	642-3364	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑤- 4 F	工・機械系学科	642-3414	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑥- 3 F	工・地球環境 (資源)	642-3616	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑦- 3 F	工・地球環境 (船舶)	642-3718	月火、木金	9:00～15:30	事前連絡必要
⑧- 2 F	工・航空工学科	642-3755	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑨- 6 F	工・地球環境 (応原)	642-3801	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑩- 3 F	工・応用理学教室	642-3829	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑪- 4 F	工・物質科学 (化機)	642-3540	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑫- 3 F	工・物質科学 (応化)	642-3573	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑬- 1 F	工・物質科学 (材工)	642-3710	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑭- 4 F	システム情報科学 (電気)	642-3922	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要
⑮- 6 F	システム情報理学	642-2697	月～金	9:00～16:30	事前連絡必要

所蔵資料の博物館等への展示出品

展 示 名：「有明海博物誌」展
 場 所：佐賀県立美術館
 期 日：平成11年2月6日(土)～3月7日(日)
 出展資料：筑紫紀行 1 帙10冊
 摂津名所図絵 1 帙12冊

● 人事異動 ●

(平成10年9月～平成10年11月)

(中央図書館)

- 10. 1 上田 大輔 情報サービス課参考調査掛 (採用)
(農学部)
- 10. 9 山本さと子 図書掛 (事務補佐員) (辞職)
- 10. 12 内田 奈緒 図書掛 (事務補佐員) (採用)

● 図書館日誌 ●

(平成10年9月～平成10年11月)

- 9. 17 自然科学系外国雑誌委員会
- 17 人文社会科学系特別図書選定委員会
- 21 総合目録データベース実務研修 (学術情報センター) (10月9日まで)
- 22 図書館情報システム検討ワーキンググループ全体会議
- 24 図書資料分類法の統一に関する検討会議
- 10. 14 第31回国立七大学附属図書館事務部課長会議 (京都大学)
- 15 第72次国立七大学図書館協議会 (京都大学)
- 20 図書館情報編集委員会
- 21 平成10年度全国図書館大会 (秋田市)
- 22 平成10年度九州地区国立大学図書館協議会実務者連絡会議 (九州芸術工科大学) (23日まで)
- 28 平成10年度第2回附属図書館研究開発室懇談会
- 28 自然科学系外国雑誌ワーキンググループ会議
- 28 福岡県・佐賀県大学図書館協議会平成10年度第1回福岡地区研究会 (九州産業大学)
- 29 図書資料の分類法の統一に関する検討会議
- 29 全学図書系掛長会議
- 11. 4 国立大学図書館協議会と学術情報センターとの業務連絡会 (東京大学)
- 5 国立大学図書館協議会理事会等 (東北大学)
- 9 講演会「情報化時代における韓日文化交流と大学図書館の役割」(中央図書館)
(講師:ソウル大学校中央図書館長 秦教勳教授)
- 9 平成10年度大学図書館職員講習会 (京都大学) (12日まで)
- 11 米国大学図書館視察 (医学分館:大瀧掛員) (20日まで)
- 12 平成10年度九州地区国立大学附属図書館人事担当事務(部)課長会議 (中央図書館)
- 12 平成10年度九州地区国立大学附属図書館電子化推進連絡会議 (中央図書館)
- 13 平成10年度九州地区国立大学附属図書館事務部課長会議 (中央図書館)
- 16 講演会「古代ローマ著作者の古刊本についてーキケロを中心にー」(中央図書館)
(講師:九州大学法学部 西村重雄教授)
- 17 学術情報センター新IR、新CAT/ILLシステム九州地区説明会 (中央図書館)
- 25 国立大学図書館協議会シンポジウム (西地区) (広島大学)

自 著 紹 介

大住圭介（経済学部教授）

『Economic Planning and Agreeability : An Investigation of Agreeable Plans in a General Class of Dynamic Economic Models.』

[中央図書館 333.19/O 79/1C]

P. j. Hammond と J. A. Mirrlees によって、時間視野のスペシフィケーションに関する問題を回避するために、Agreeable Plan というプランが提示された。(J. A. Mirrlees 教授は現在ケンブリッジ大学教授であり、1996年度にノーベル経済学賞を授与されている)

この Agreeable Plan については集計的モデルではかなり分析がすすめられてきたが、多部門経済モデルではほとんど解明されていなかった。本書では、Agreeable Plan が種々の角度から検討されており、Heal の Unanswered Question に対する解答が提示されている。本書は科学研究費補助金「研究成果刊行費」によって出版補助がなされている。

西田哲明（理学部助手）

『Mössbauer Spectroscopy of Sophisticated Oxides』

[中央図書館 425.5/Mo 81]

無機化合物は化学的に安定である。このため、磁性材料や導電性材料として重宝されている。無機化合物を代表的なものとして、酸化物超伝導体がある。本書では、超伝導セラミックス、ニューガラス、各種磁性体など、酸化物の短距離構造、超伝導特性、導電性、赤外透過性、磁性について最新の研究成果を紹介している。構造解明のためには、放射線を利用

した手法として知られる、メスバウアー分光法 (Mössbauer Spectroscopy) を用いている。

1986年に Bednorz と Müller により発見された酸化物超伝導体は、「酸化物では超伝導は起こらない」とする、それまでの常識を覆すものであった。彼らは、この発見により1987年にノーベル物理学賞を受賞している。これまで約40種類の元素でメスバウアー効果が観測されており、この手法を発見した、R. L. Mössbauer 自身も1961年にノーベル物理学賞を受賞している。本書が酸化物の構造と物性に関心を持つ研究者のお役に立てば幸いである。西田は、Chapter 2 (Mössbauer effect in inorganic glasses) を担当している。B5判、340頁。

関 一敏（文学部助教授）

『中山みき・その生涯と 思想：救いと解放の歩み』

[文学部図書室 宗教/24E/133]

友人と三人で天理教教祖・中山みき (1798~1887) の生活者・宗教者としての生涯についての本をまとめました。①被差別部落とみき (池田) ②神がかりから宗教思想の形成まで (島蘭) ③比喩の役割 (関) といった論文五篇に加えて、現在の問題意識からみた中山みきについての鼎談をおさめました。神と人、神話と歴史、身体と記憶をめぐる宗教学的な主題群を短い論のなかにつめこもうとしたので、妙に註の多い簡処がありますが、著者としてはだいぶ思い入れの強い本です。

関 一敏 (文学部助教授)

『聖母の出現：近代フォーーク・カトリシズム考』

[文学部図書室 宗教/41F/165]

近年、東欧のメジュゴリエでみられたような聖母出現の出来事は、19世紀前半から今世紀初めにかけてヨーロッパ各地で頻りに体験された歴史をもっている。本書は、そのうち19世紀のフランスでの4つの出来事（パリ奇跡のメダル、ラ・サレット、ルルド、ポンマン）をとりあげ、小さな神秘的体験が大きな巡礼聖地を形成する過程をたどったもの。少数者の体験とことばがどのようにして周囲の者たちに伝えられ、信憑性を構築して行くか、そのさいに民俗的・歴史的聖母表象や近代科学技術・複製技術がいかなる役割を担ったか、について考えたかった。

中山宏明 (歯学部教授)

『現代微生物学入門』

[医学分館 QW 4/G 34/1998]

我々は長年本務の傍ら携わっていた看護教育に役立つため、1985年に教科書「ナースのための微生物学」を上梓した。ところがこれが一部の医学生にも読まれるという予想外のことが起こった。聞けば、分厚い教科書と併読すると分かりやすいという。つまり手引き書である。これは賢明なやり方であるが、医学生にはそれに相応しい手引き書があつて然るべきだろう。我々はこのように考え、前著を拡充して本書の初版を1987年に刊行した。本書には医歯系の学生に必須の情報はもちろん盛りこんである。しかし我々の本意は、上の経緯から明らかなように、医歯学生は本書を手引にしてぜひ重厚な本格的教科書に取り組んでほしいということである。

我々3名は本学医学部1960年同期卒業の仲間である。そのため、本書の特色をなすユニークな構成をはじめ、執筆のあらゆる面にわたって徹底的な議論

を重ねることができた。その点で本書は分担した原稿の単なる寄せ集めではなく、真の意味での共著とってよいと思う。

中山宏明 (歯学部教授)

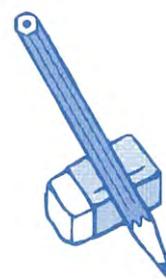
『微生物学』

[医学分館 QW 4/B 47/1998]

本書の初版は、1969年本学医学部細菌学教室の教授であった故武谷健二先生（元学長）が中心となって同教室関係者の共著として刊行され、以来本学をベースとする教科書として版を重ねてきた。第7版の著者も本学教官または本学出身者である。また初版以来一貫して、医・歯・薬三学部で微生物学を担当する者が分担して執筆するという原則が守られてきた。もちろんこれらの学部で使用されることを考えての措置であるが、この学際的執筆陣は類書にほとんど見られない特色ではないかと思う。

本書の体裁はコンパクトであるが、内容は見かけ以上に充実していると自負している。とくにこの第7版では、過去の版以上に新しい情報を盛りこむようにつとめた。その結果内容的には、もっとも大量の情報採取が要求される医学生にとっても十分以上の水準に達したのではないかと考えている。

低コストながら「相当の品質」というのがとりあえずの自己評価（自画自賛）だが、それ以上の取柄があるかどうかは読者の判定にまつほかはない。





本学関係者著作寄贈図書

蔵書の充実を図るため、図書館では著作物刊行の節は一部ご寄贈くださるようお願いしております。今回は次の教官からご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

〔中央図書館〕

大住圭介（経済学部教授）

「Economic planning and agreeability:
an investigation of agreeable plans in a
general class of dynamic economic models」
Keisuke Osumi.

Fukuoka: Kyushu University Press, c1986.

〔中央図書館 333.19/O 79/1C〕

西田哲明（理学部助手）

「Mössbauer Spectroscopy of Sophisticated
Oxides」

Z. Homonnay, S. Musić, T. Nishida, N.S.
Kopelev, A. Vértes.

Budapest: Akadémiai Kiadó, c1997.

〔中央図書館 425.5/Mo 81〕

〔医学分館〕

中山宏明（歯学部教授）

「現代微生物学入門」

南嶋洋一、水口康雄、中山宏明著
第3版 南山堂 1998

〔医学分館 QW 4/G 34/1998〕

中山宏明（歯学部教授）

「微生物学」

中山宏明〔ほか〕著

第7版 医学書院 1998

〔医学分館 QW 4/B 47/1998〕

仁保喜之（医学部附属病院教授）

「内科学進歩のトピックス」

仁保喜之、石橋大海編集

九州大学出版会 1998

〔医学分館 WB 115/N 28/1998〕

〔文学部〕

関 一敏（文学部助教授）

「中山みき・その生涯と思想：救いと
開放の歩み」

池田士郎、島蘭 進、関 一敏著

明石書店 1998

〔文学部図書室 宗教/24E/133〕

関 一敏

「聖母の出現：近代フォーク・カトリ
シズム考」

関 一敏著

日本エディタースクール出版部

1993

〔文学部図書室 宗教/41F/165〕

九州大学附属図書館のホームページから利用できます。

アドレスは <http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/index-j.html> です。

OPAC（九州大学の図書・雑誌の所蔵検索）、Webcat（全国大学の図書・雑誌の所蔵検索）、
CDサーバデータベース検索（Web of Science はじめ全9件のデータベース）などを利用できま
す。